

望まれるスポーツ指導者像とは  
—アンケート調査から見えてくる新たな課題—

浅井健大

1. はじめに

今日、日本のスポーツの競技水準は日本人選手の海外チームでの活躍、リオデジャネイロオリンピックでの日本人選手団の目覚ましい活躍などにより世界からも高い評価をえている。この進歩の裏には優秀な人材を育て上げる指導者の質の向上も要因となっているだろう。

このような日本スポーツ界の進歩の中、若手選手の競技外での不祥事などから国際大会での活躍を期待された選手たちが出場のを失ってしまう事件が起きている。

こういった問題を受けて、今日のスポーツ界は選手の競技力向上のみならず、スポーツマンシップ、道徳的規範を指導者が示していかなければならない。本研究ではスポーツという文化の移り変わりの中、それに対応して変化する「今求められる指導者像」についてアンケートや過去の事例を踏まえ明らかにしていきたい。

本研究の先行研究は、以下の3点がある。

- 1.) 常浦光希、田原陽介、高岡敦史、山本孔一、『運動・スポーツ生活から見たスポーツ指導者への変容：ライフストーリーを用いて』、岡山体育学研究(23)、33-38、2016-03。
- 2.) 杉本厚夫、桑野豊、『222 ライフステージ別に見たスポーツ指導者の指導活動の違いについて』、日本体育学大会号(28)、142、1997-10-12。
- 3.) 桑野豊、『207 日本体育協会における公認スポーツ指導者の構造的特性とその指導意識について』、日本体育学号(27)、105、1976-08-20。

これらの研究はスポーツ指導者の在り方について多角的視点から追及している素晴らしい研究である。しかしながら実質的に『良い指導者とは何か』について明言するに至っていない。そこで本研究ではその『良い指導者とは何か』についてスポーツの変容とアンケート結果を手掛かりに明らかにしていきたい。

2. スポーツの変容から見る指導者像の変化

まず研究を進めていくにあたって、スポーツという文化がどのように変化していったのかについて触れていきたい。17世紀から18世紀にかけてスポーツという言葉は貴族の狐狩りなどの娯楽を指していた。19世紀になるとルールを定め、その結果を競い合う現代行わ

れている競技スポーツとしての形となった。この競技スポーツが労働者などの民衆に気晴らしや息抜きとして広がっていった。時期を同じくしてピエール・ド・クーベルタンにより近代オリンピックが創設され、瞬く間に世界に広がっていった。こういった形でスポーツは世界的に順位を競うものとなっていったことから、競技者たちは競技力の向上を目指し、それをサポートする者として指導者が生まれた。それにともない各競技において競技連盟、国際連盟が発足していき、スポーツというものが組織的に運営されていくものとなった。こういった流れを受けてスポーツは肉体や技術を競い合う競技スポーツとして人々の暮らしになくてはならないものとなっていった。<sup>1</sup>

また、近代化とともに日本の学校教育の中に体育というものが生まれた。この頃の体育は軍事的意味合いが強く富国強兵のための兵士育成、集団行動、指示通りに動くなどスポーツとはかけ離れたものだった。しかし、体育とスポーツは形が違うがとても強い関係性にある。そして、戦後日本が平和主義を唱えたことにより、体育の目的は「心と体を一体としてとらえ、適切な運動の経験と健康、安全についての理解を通して、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図り、明るく楽しい生活を営む態度を育てる。」こととなったことから、普段の生活の中で行いやすいスポーツが体育の中で行われるものとなった。<sup>2</sup>

また、今日のスポーツ界の発展の裏には生涯スポーツに取り組むシニア層の増大も関わっている。これはスポーツを通して健康の保持増進を行いたいという人が増えてきているからである。さらに定年退職を迎えた世代が新しい趣味として生涯スポーツに取り組むことが近年盛んになっている。これに伴い普段スポーツに触れる機会が少なかった人々の多種多様な身体能力、求めているスポーツレベルに応じた指導を健康面にも注意を払いながら行える指導者のニーズが高まってきている。<sup>3</sup>

このように人々の生活になくてはならないものとなっているスポーツだが、これを成り立たせるためには必ずルールが必要となってくる。スポーツはルールがなければただの闘争になってしまう。このことからスポーツ指導者はスポーツを行うものとしてのモラルを

---

<sup>1</sup> 多木浩二、『スポーツを考える－身体・資本・ナショナリズム』、ちくま新書、1995年、120頁

<sup>2</sup> 文部科学省の体育目標より

<sup>3</sup> 松尾哲矢、『アスリートを育てる〈場〉の教育』、青弓社、2015年180頁

選手に教え、それを実行させることが指導者の責務の一つである。<sup>4</sup>

昨今の日本は、競技スポーツの大きな飛躍をリオデジャネイロオリンピックにて獲得メダル過去最多という形で世界に示した。その中でオリンピックの活躍が期待されていたバドミントン男子の桃田賢人選手、田児賢一選手が違法賭博店に出入りをしていることが発覚し桃田選手は日本代表選手の指定解除、無期限の競技会出場手停止、田児選手は無期限の登録抹消となった。桃田選手はこの事件の発覚前に BWF(世界バドミントン連盟)世界ランク二位になったばかりでリオデジャネイロオリンピックでの活躍が大きく注目されていた。これには田児選手が世界で行われるリーグ戦の際の空き時間にカジノなどに通っていたという事実をコーチ陣も把握していたが止めることが出来ず、その結果日本で桃田選手を誘い違法賭博店に行ったという経緯があった。何度も違法賭博店に通うなか桃田選手は知人などからお金を借りて賭博を行うほどにのめりこんでしまっていた。こういった問題は選手本人のみの責任にとどまらずバドミントン全体の評価を下げる結果となった。若手選手の世界での活躍もあり競技としてメジャーになりつつあったバドミントン界にとっては大きな痛手となった。表向きは世界のトップアスリートを失ったという結果だが、長い目で見るとバドミントン界そのもののイメージを悪くし、バドミントンを志す子供たちが減ってしまう。このことが、結果的にバドミントン界の衰退に繋がってしまうことは想像に難くない。

この他にもスポーツ選手の不祥事などがニュースで取り上げられることが多くなってきている。このことは、スポーツというコンテンツのそのものの注目度が過去に比べて高まっている証明ともいえるであろう。

選手は突き詰めれば突き詰めるほど競技にすべてを注ぎ込んでいくことになる。そこで選手を一番近くでサポートする指導者は選手の私生活まで気を配り、モラルなどの指導を行っていくことが求められているのである。

### 3. アンケートから結果からみえてくる指導者像

アンケート調査の方法と回収結果は以下の通りである。

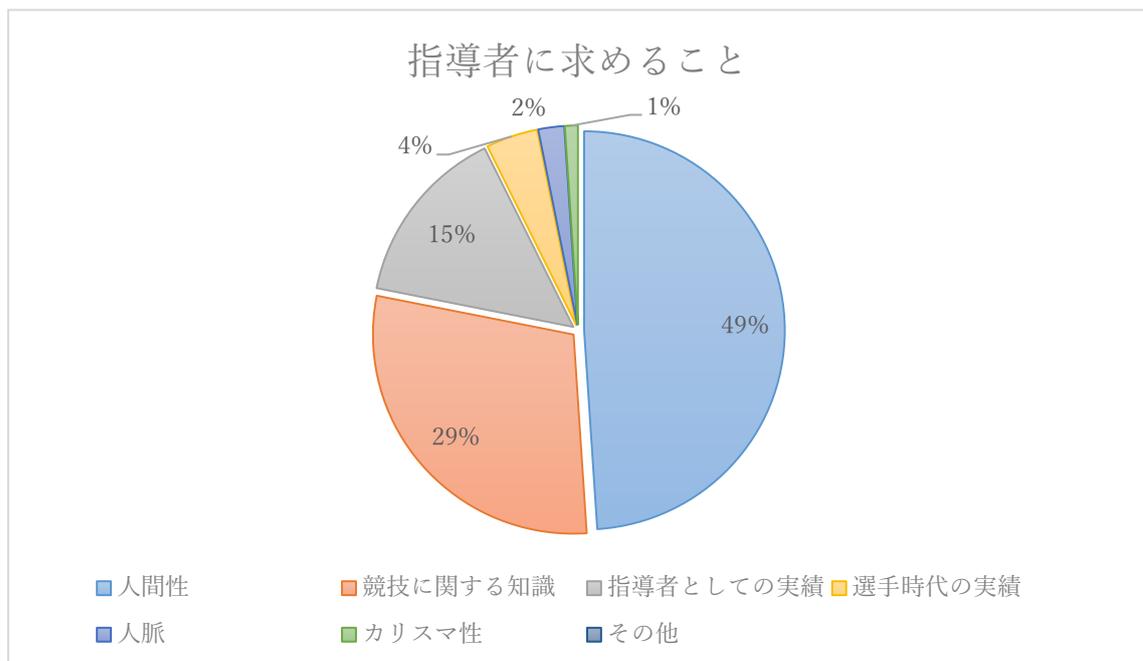
---

<sup>4</sup> 多木浩二、『スポーツを考えるー身体・資本・ナショナリズム』、ちくま新書、1995年、同上、108頁

調査名称 : 指導者に対する意識アンケート  
 調査実施者 : 浅井健大  
 調査対象 : 尚美学園大学、総合政策学部、「クラブマネジメント」受講生を対象  
 査票の記入方法 : 自記式  
 配布と回収の方法 : 授業時に配布・回収  
 配布・回収日 : 2016年10月4日  
 配布した票数 : 98票  
 回収した票数 : 全回収数 98票 (回収率 100%) うち有効回収数 98票 (有効回収率 100%)

本学ライフマネジメント学科の二学年を対象にアンケート調査を行った。その結果、98人の学生からの意見を集めることが出来た。アンケートの具体的内容は末尾資料に示す。本学のライフマネジメント学科はスポーツ活動が盛んで、現役でスポーツを行っている学生や高校時代までスポーツに行ってきた生徒が多い。そのため、今求められる指導者像を明らかにしていくにあたって有益な対象者であろう。

設問1は選択肢を「選手時代の実績、指導者としての実績、競技に対する知識、人間性、人脈、カリスマ性、その他」と設定し指導者に一番必要だと思うことを調査したところ、以下のような結果になった。



アンケートを見ていくと“人間性”を重要視するという声が多く集まった。人間性を選択した学生の中では「選手時代の競技実績や指導者としての実績などの経験も大切だが、選手の可能性を見出すのには指導者の人間性や練習前後の会話が大事である。」や「実績よりも人間としてしっかりとした指導者が良い。自分の指導よりも私達生徒の気持ちを考えてくれる人で自分だけのやり方ではなく私達の考えも聞いてくれた。」「選手と一緒に成長していこうとする指導者が良い」など、指導者との信頼関係を重要視するという意見が多く集まった。選手と指導者という枠にはまり過ぎず、同じ目線に立ち成長していきたいという意見が多く集まった。この背景には、アンケート対象となった学生が指導者と同じ成人であるからだと考えられる。しかしジュニア世代では指導者とは大人と子供、先生と生徒という関係図が大部分を占めるので今回のアンケートとは違う結果となることも考えられる。逆に「人間性は年上だから自分よりも優れていて当たり前」という意見もあった。この回答をした人の中で一番多かった意見が「ON と OFF がしっかりしていて、やろうとする人には教え、やろうとしない人には教えない。はっきりしている人だったので不満を持つことが少なかった。」や「練習中はとても厳しいが練習後はとても優しい。厳しい中にも自分たちを成長させたいという愛を感じました。」などの指導時とそのほかを分けて欲しいという意見であった。選手は一日のうちの短い練習の時間に集中して練習を行うため練習外にまで緊張が続くと精神的ストレスが溜まりやすくなり質のいい休息がとれなくなってしまふ。このことが原因でケガをしてしまったという例も多くある。また指導者からの過度なプレッシャーが原因でうつ病になってしまい、私生活にまで影響が出てしまうというアスリート特有の症状を引き起こす場合もある。練習外での会話により信頼度が高まっていったという意見も多くあった。また指導者が常に厳しい態度をとっているとアドバイスが聞きづらいなどの意見があり、やはり選手にとって一番近い存在である指導者は競技の場面以外でも選手への影響力が高いことが分かった。

次に多かったのは、“競技に関する知識量”という項目であった。このなかで「人に何かを教える時に、必ず自分が理解しているうえで教える。理解や知識量が少ないならまずは自分が理解しないと自信をもって指導ができないから。間違った知識を教えて怪我や取り返しがつかないことが起きてしまったら指導者としての信頼を失ってしまうから。」や「実績があるということも大事だけど、選手がやってみて成功することも指導が合わなくて失敗することもあると思います。それよりも知識があり、一人一人に応じたメニューが作れるような指導者が良いと思います。」といった意見が多くあった。スポーツ科学は日々進化し

でいっているため、競技力向上を求める選手たちはより効率のいいトレーニング方法や動きを行いたいと考える。指導者も常に新しく解明されていくスポーツ科学を学び、それを実践していかなければ勝ち続けることは難しいであろう。

設問2は、「今までの指導者の中でよい指導者はいましたか？」という質問を設定したところ多くの指導者の例を集めることが出来た。

結果を踏まえて見えてきたのは、ジュニア時代で初心者にはスポーツの楽しさ、上を目指していく選手たちには勝負の厳しさや礼儀作法など競技以外にも成長できるような指導をする指導者が良い指導者だという意見、さらにどの選手にも平等にチャンスを与え指導してくれる指導者が良い指導者であるという意見もあり多種多様な指導者像であった。

設問3は「指導に叱咤や体罰を行うことは必要だと思いますか？」と質問を設定した。その結果叱咤、体罰を行うことの是非について、ほとんどの回答者が行ってはならないと答えた。しかし、少数の回答者は時と場合により叱咤することは必要であると述べた。その理由としては、志やモチベーションが均一ではない部活動などでは叱咤することによって生徒を一時でも一つのことに集中させることもチームスポーツなどでは必要であるという意見であった。こういった意見は一定以上の実績を残した経験からくるものであったため一概に多数意見側が正しいとは言い切れない。反対側の意見としては怒られることにより委縮してプレーに集中できなくなる、スポーツを楽しめなくなってしまうという意見が集まった。このアンケート結果から様々な需要、意見が年代、レベルに合わせてあることが分かった。

#### 4. 指導者の成功事例

最後に指導者としての成功事例を挙げたい。リオデジャネイロオリンピックへ向けて2012年11月に日本男子柔道監督に任命された井上康生監督である。日本男子柔道はロンドンオリンピックで史上初、金メダル無しという屈辱に終わった。そこで改革を進めるべく井上康生監督が指揮をとることとなった。井上康生監督は就任会見で「いかにして組んで一本を取りに行く過程をつくるか。それを考える。そのためにスポーツ科学も利用する。どうすれば、効率よく勝てるか考えた上でトレーニングをして総合力で戦う」と所信表明をした。井上監督は、その言葉通り、まず稽古の中身を見直した。量より質。体育会系のランニング、寝技、乱取りで汗を流すだけの練習内容を見直して、ボディビルの専門家を招き、筋力、持久力の科学的トレーニングを取り入れたのだ。また栄養学の専門家にも相

談、トレーニング、食事、休養のバランスを考えてスケジュールを組んだ。また試合の対策も、今までのように、ただビデオを見てあれこれ策を練るだけでなく、対戦相手の傾向や選手、自らの長所、短所、フィジカルなどをデータ化して示した。「世界の柔道に対応するためには、対戦相手のルーツを知ること」と、ブラリアン柔術、サンボ、モンゴル相撲、沖縄角力といわれる沖縄相撲まで選手に体験させた。ジョージアの躍進が民族格闘技の「チダバオ」にあるとも言われていて、まるで武士道の基本、敵を知ることから始めたのである。

その一方で、精神論にも力を入れた。科学と非科学の融合である。非科学の部分では、柔道 3 連覇の野村忠宏を合宿に招き、体験談を語ってもらう。野村は「五輪は特別な力がないと勝てない」と、勝者にしか語れないメンタリティを代表選手に伝えている。井上監督は「組織」の変革にも手を打った。軽、中、重の担当コーチ制を復活、重量級は、アテネ五輪 100kg 超級の金メダリスト、鈴木桂治が担当した。師弟のつながり、チームのまとまりが、目に見えない力を日本選手団全員に与えることを、井上監督は自らの体験から熟知していたのである。3 連覇の野村忠宏は、「井上康生が監督になって改革に取り組み本当に強くなった。篠原先輩がダメと言っているわけではなく、いいものを引き継ぎ、そして悪いものを改革するというやり方をしている」と、大会前から、井上路線を高く評価していたが、代表の空気も選手の勝利に対する意識も大きく変化していた。<sup>5</sup>東京五輪への期待が高まるが、その一方で、井上監督は、さらなる強化プランを暖めているという。

## 5. おわりに

本研究の結果、スポーツ文化の変化やアンケート結果、成功事例をもとに見えてきたのは多種多様な指導内容、指導者の需要であった。成功事例でも紹介したが、井上康生監督の勝利するために今までの歴史、固定概念を覆すような指導。勝利のために要求される技術、作戦が変わりゆく中、それに対応できる指導。スポーツを取り巻く環境の変化に応えることのできる指導。アンケート結果から見ても必要とされる能力は競技者ごとに変わってくる。こういった多種多様なニーズに満遍なく応えられるようになろうとすればその道

---

<sup>5</sup> THEPAGE 日本柔道復活の裏に井上康生監督が進めた「勝利の改革」

[https://thepage.jp/detail/20160813-00000005-wordleafs?pattern=2&utm\\_expid=90592221-74.LdrGpjcWS4Czgnu3l9N7Eg.2&utm\\_referrer=https%3A%2F%2Fwww.google.co.jp%2F](https://thepage.jp/detail/20160813-00000005-wordleafs?pattern=2&utm_expid=90592221-74.LdrGpjcWS4Czgnu3l9N7Eg.2&utm_referrer=https%3A%2F%2Fwww.google.co.jp%2F)  
2016, 10, 01

のプロフェッショナルになることは出来ない。選手の望みをサポートすることも難しくなっていくであろう。またジュニア期では競技をする環境が変わっていくため、その区間ごとで完成を目指すのではなく、次の段階へとつながる指導をすることが求められる。

この結果望まれる指導者像とは、選手の競技人生全体を見てその中で指導すべき内容の作成、自分の役割を自覚しこれを完遂できる指導者であるといえるであろう。

以上のように本研究では、『望まれるスポーツ指導者像とは』について研究を進めてきた。先行研究に依拠しつつ、明言することが難しい“良い指導者像”について、アンケートとスポーツという膨大なコンテンツを紐解いていくことによって迫ることができたといえるであろう。これにより進化し続けるスポーツの更なる発展の一助を担うことが出来たといっても良いだろう。以上のように本研究では、『望まれるスポーツ指導者像とは』について研究を進めてきた。先行研究に依拠しつつ、明言することが難しい“良い指導者像”について、アンケートとスポーツという膨大なコンテンツを紐解いていくことによって迫ることができたといえるであろう。これにより進化し続けるスポーツの更なる発展の一助を担うことが出来たといっても良いだろう。しかし日々変化を遂げるスポーツを指導していくことは、指導者もまた変化、進化していかなければならないことは言うまでもない。これから私自身もスポーツ指導に携わっていく中で、本研究内容の更なる進展を今後の課題としたい。

図表一覧

## 指導者に対する意識アンケート

1. あなたが指導者に求めることは何ですか？次の中から選んでください。

またその理由を下のスペースに書いてください。

ア、選手時代の競技実績 イ、指導者としての実績 ウ、その競技に対する知識量  
エ、人間性 オ、人脈 カ、カリスマ性 キ、その他( )

2. あなたが今までによい指導者だと思った指導者はどんな指導者ですか？

3. あなたは競技指導の際に怒鳴りつけたりすることや、体罰は必要だと思いますか？

その是非と理由を下のスペースに書いてください。

アンケート内容は研究にのみ使用します。

ご協力ありがとうございました。

参考文献、引用文献一覧

- 多木浩二、『スポーツを考えるー身体・資本・ナショナリズム』、ちくま新書、1995年
- 玉木正之、『スポーツとは何か』、講談社現代新書、1999年
- 松尾哲矢、『アスリートを育てる〈場〉の教育』、青弓社、2015年

キーワード

リオオリンピック、モラル、アンケート、学校体育、柔道、バドミントン、生涯スポーツ、  
スポーツ文化、ナショナリズム

## 要約

本研究では、『望まれるスポーツ指導者像とは』についてアンケート、スポーツというコンテンツを細分化しこれを手掛かりとして、明らかにしていくことを目的とした。

本研究の結果、スポーツ文化の変化やアンケート結果、成功事例をもとに見えてきたのは多種多様な指導内容、指導者の需要であった。成功事例でも紹介したが、井上康生監督の勝利するために今までの歴史、固定概念を覆すような指導。勝利のために要求される技術、作戦が変わりゆく中、それに対応できる指導。スポーツを取り巻く環境の変化に応えることのできる指導。アンケート結果から見ても必要とされる能力は競技者ごとに変わってくる。こういった多種多様なニーズに満遍なく応えられるようになろうとすればその道のプロフェッショナルになることは出来ない。選手の望みをサポートすることも難しくなっていくであろう。またジュニア期では競技をする環境が変わっていくため、その区間ごとに完成を目指すのではなく、次の段階へとつながる指導をすることが求められる。

この結果望まれる指導者像とは、選手の競技人生全体を見てその中で指導すべき内容の作成、自分の役割を自覚しこれを完遂できる指導者であるといえるであろう。

以上のように本研究では、『望まれるスポーツ指導者像とは』について研究を進めてきた。先行研究に依拠しつつ、明言することが難しい“良い指導者像”について、アンケートとスポーツという膨大なコンテンツを紐解いていくことによって迫ることができたといえるであろう。これにより進化し続けるスポーツの更なる発展の一助を担うことが出来たといっても良いだろう。